

静岡県立劇団 SPAC (スパック) が再びケ・ブランリー美術館へ！ レヴィ＝ストロース没後 10 年の今年、同美術館からのラブコールに応え 祝祭音楽劇『イナバとナバホの白兎』を再演！

プレス関係各位

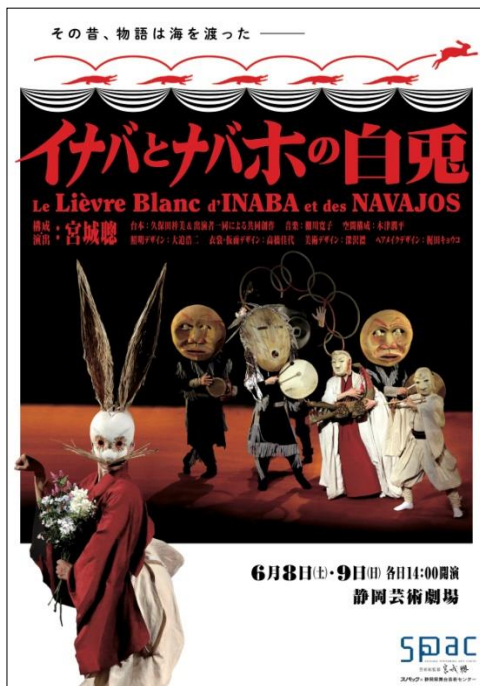
初夏の候、皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。平素より、SPAC-静岡県舞台芸術センターに格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

2016 年にフランス国立ケ・ブランリー美術館との共同制作として発表した、宮城聡演出『イナバとナバホの白兎』が、再び同美術館からの招聘を受けて、パリでの再演が決定いたしました。

本作は、20 世紀最大の思想家・人類学者レヴィ＝ストロースによる「アジアで生まれた神話の一体系が日本に伝わり、のちに北米にも伝わったのではないかと——」という大胆な仮説を、演劇的想像力で読み解いた、華やかな祝祭音楽劇です。フランスにおける非ヨーロッパ圏芸術の殿堂であるケ・ブランリー美術館より開館 10 周年記念作品として委嘱され、静岡・駿府城公園で野外劇版のプレ上演を経て、同美術館のクロード・レヴィ＝ストロース劇場にて初演。世界的デザイナー、ジャン＝ポール・ゴルチエ氏ら著名人も多数来場し、高い評価を受けました。また、本作に感銘を受けたアフリカ出身フランス在住の女性作家レオノーラ・ミアノ氏が宮城を演出に指名し、2018 年国立コリヌ劇場での『顕れ(原題: Révélation)』上演に繋がりました。

今回のパリ公演に先立つ静岡公演は、チケット発売開始より間もなく完売。日本国内での本作への注目度の高さも伺えます。

つきましては、ご多用中恐れ入りますが、皆様の関心をいただき、ご紹介ならびにご取材を賜りたく、お願い申し上げます。



『イナバとナバホの白兎』

The White Hare of Inaba-Navajo

構成・演出： 宮城聡

台本： 久保田梓美&出演者一同による共同創作

音楽： 棚川寛子

空間構成： 木津潤平

照明デザイン： 大迫浩二

衣裳・仮面デザイン： 高橋佳代

美術デザイン： 深沢襟

ヘアメイクデザイン： 梶田キョウコ

出演(五十音順)：

赤松直美、阿部一徳、石井萌水、大内米治、大高浩一、加藤幸夫
小長谷勝彦、榊原有美、桜内結う、佐藤ゆず、杉山賢、鈴木真理子
大道無門優也、武石守正、館野百代、寺内亜矢子、ながいさやこ
野口俊丞、本多麻紀、牧山祐大、宮城嶋遥加、森山冬子、山本実幸
吉植荘一郎、吉見亮

●公演日時： 6月19日(水)20:00開演、20日(木)20:00開演、21日(金)20:00開演、22日(土)18:00開演
23日(日)17:00開演

●会場： フランス国立ケ・ブランリー美術館 クロード・レヴィ＝ストロース劇場 [日本語上演/フランス語字幕]

※開幕前日の6月18日(火)に公開ゲネプロを行います。ぜひご取材ください。

【演出家プロフィール】



宮城 聡(みやぎ・さとし)

1959年東京生まれ。東京大学で演劇論を学び、90年ク・ナウカ旗揚げ。国際的な公演活動を展開し、同時代的テキスト解釈とアジア演劇の身体技法や様式性を融合させた演出で国内外から高い評価を得る。2007年4月SPAC芸術総監督に就任。14年アヴィニオン演劇祭から招聘された『マハーバーラタ』の成功を受け、17年『アンティゴネ』を同演劇祭のオープニング作品として法王庁中庭で上演。アジアの演劇がオープニングに選ばれたのは同演劇祭史上初めてのことであり、その作品世界は大きな反響を呼んだ。平成29年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞。19年4月フランス芸術文化勲章シュヴァリエを受章。

◆ケ・ブランリー美術館 Musée du quai Branly

ルーブル、オルセー、ポンピドゥーとともにパリの4大美術館に数えられるケ・ブランリー美術館は、2006年、非西洋芸術に深い関心を寄せるシラク元大統領の肝いりによりフランスにおける非ヨーロッパ圏芸術の殿堂としてオープンした。以来、西欧中心の芸術観に対するアンチテーゼとして、パリの国立美術館の中でも最先端の思想で運営されている。

◆宮城聡と同美術館のあゆみ

- 2006年** ケ・ブランリー美術館 クロード・レヴィ=ストロース劇場のこけら落とし公演として、『マハーバーラタ～ナラ王の冒険～』を上演。
- 2013年** フランス公演ツアーの一環として同劇場にて、再び『マハーバーラタ～ナラ王の冒険～』を上演。
(ル・アーヴル、ルヴァロワ=ペレ、カーンも巡演、全9公演を実施)
- 2016年** 同美術館より再び熱いラブコールが寄せられ、開館10周年記念委嘱作品として『イナバとナバホの白兔』を約2週間にわたり上演。



2016年 ケ・ブランリー美術館での公演より (撮影: SPAC)

フランス現地での劇評(抜粋)

●『フィガロ』紙 2016/06/09 <アルメル・エリオ>

アルメル・エリオの演劇コラム: ケ・ブランリーで、イナバとナバホと白兔とともに。レヴィ=ストロースの著作から着想を得た日本人演出家が、ニッポンとアメリカ先住民の文化を対話させた。(翻訳: 片山幹夫)

●『ラ・クロワ』紙 2016/06/13 <ディディエ・メルーズ>

ブランリー河岸で、白兔が神話を横切り駆け抜ける。

ケ・ブランリー美術館の10周年記念を祝うために、日本人演出家、宮城聡がやって来た。10年前に目のくらむほど素晴らしいマハーバーラタとともに開館を祝された美術館附設劇場が、再び彼の魔法で魅了される。(翻訳: 片山幹夫)

2016年ケ・ブランリー美術館での公演の際の観客のコメント

●クリスチャン・マセ氏(駐伊フランス大使、元駐日フランス大使)

今晚私は、深い意味を持つと同時にエネルギーにあふれた作品に出会うことができ、非常に心を動かされました。

●ジャン=ポール・ゴルチエ氏(デザイナー)

演出も舞台美術も演技も音楽も例外的な美しさ。日本がいかにも伝統を活かしながらアヴァンギャルドでありうるかを見せてくれました。

●笈田ヨシ氏(俳優、演出家、作家)

マハーバーラタよりもまた一段と宮城さんのスタイルが進歩し、日本だけでなく世界でもほかに見られないスタイルを作っていて、非常に感動しました。

●ステファヌ・マルタン氏(ケ・ブランリー美術館館長)

すべての観客、そしてケ・ブランリー美術館にとって素晴らしい時間でした。私のいまの夢は、ケ・ブランリー美術館とSPACとの間に恒久的な関係ができていくことです。

※『イナバとナバホの白兔』パリ公演についてのお問い合わせならびに取材のご希望は

「SPAC-静岡県舞台芸術センター 広報担当:計見」までご連絡下さい。

Tel: 054-203-5730(静岡芸術劇場) / 携帯: +44-7738-901-614(計見) / E-mail: keimi@spac.or.jp